

「食と農」の博物館

展示案内 No.61

展示期間■2012.9.1～2012.9.23

東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033
FAX.03-3439-6528

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)

休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

特別展

『牛と人の生活史』

—大山錦子が描く世界—



子牛検査 72 × 148

はじめに

大山錦子さんは、「牛と人のかかわり」の風俗を描く漫画家です。子供の頃に出会った牛との思い出を軸とし、国内外を問わず牛の飼育地を訪ね歩き描いています。昨年の大震災、そして福島原発事故による放射能汚染の和牛への揺がりは、大山さんにとっても衝撃的な出来事でした。

和牛は古来、役牛として稲作文化と深くかかわり育まれ、日本人の精神社会にも定着してきた家畜です。心に残る水田を耕す牛の働く姿は、一幅の絵巻のように美しい風景でした。この度

の被災により思い出も、一瞬にして失われ心が痛みます。

今回の特別展では大山さん自身の記憶を辿りながら“漫画”という、親しみやすい手法で描く「牛と人の生活史」を紹介したいと思います。作品は民俗的視点からも捉えており、記憶遺産的資料としてもみることができます。

本展をご覧になりいくらかでも牛と人のかかわりについて知る機会となり、我が国の家畜文化の理解に繋げて頂ければ幸いです。

東京農業大学「食と農」の博物館

あいさつ

大山錦子

衣食住の中で牛を探せば大変多いのに驚きます。牛は古い時代から人の生活を助け、一つ屋根の下で人と家族同様に暮らし、牛の労力は一家の大黒柱的な存在でした。

昭和三十年頃から機械化が進み、牛の飼い方から用途まで一変しました。牛？と言えばスーパーのトレイに並んだ牛肉が脳裏

に浮かぶほど食用に直結します。(農宝)と大切にされた時代の「牛と人の生活史」を探れば、懐かしい囲炉裏の煙の匂いまで呼び起こされます。私は「肉牛としての和牛」「使役の牛」「戦中の牛」「信仰と牛」などに分けて描きました。ここでは主なものについて紹介します。

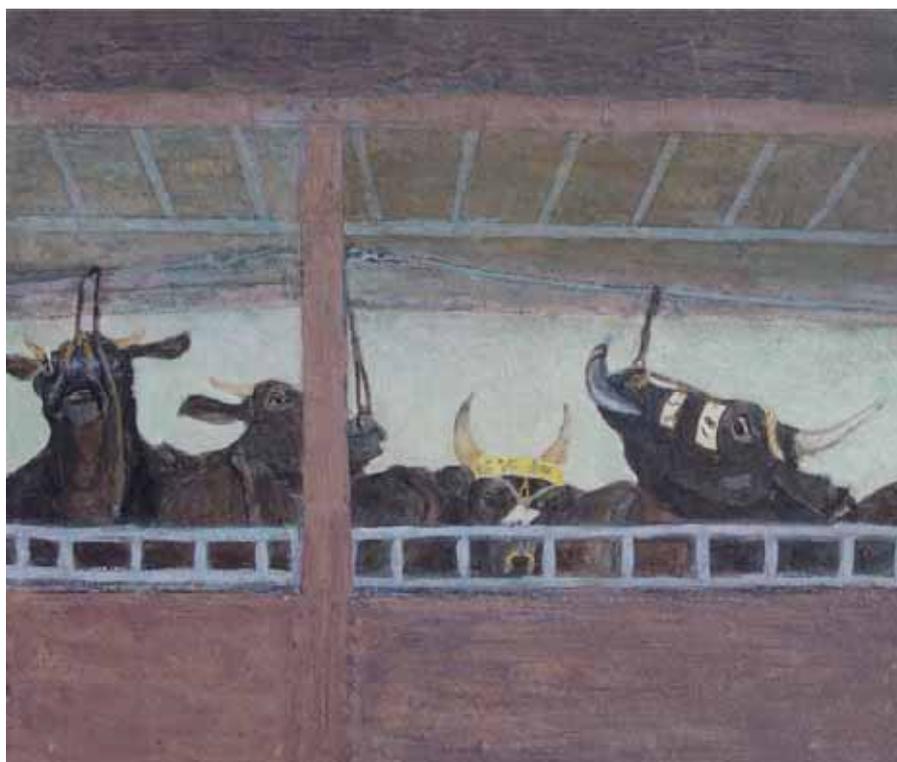
東北の被災者の方々にお慰めの言葉もありますが、一瞬なりとお気持ちが晴れる作品をと、念じながら制作しました。

肉牛としての和牛

運ばれる牛たち

霧が深い朝でした。大型運搬車がバックするブザーが響き牛舎のあたりは作業衣を着た人の動きが活気に満ちていました。運搬車の後方の荷台扉は観音開きに開かれ、中を覗くとすでに四頭の立派な体格の牛がいました。あちこちの農家から集められて来たのです。

牛たちの鼻先は高い位置に向けて短いロープで結わえられ白い息を撒き、眼だけがモノを言うようでした。牛舎の牛たちも只ならぬ気配を感じてか右往左往して叫んでいました。飼い主と農協の職員らしき人と三人が慣れた動きで次々と牛を牛舎から曳き出し、数分で四頭の牛を運搬車に載せ扉を勢い良く閉め、次の農家に向け出発しました。集められた牛たちは東濃家畜市場に運ばれるのでした。



F10

大山錦子さんは叙情の画家です。みたものをそのまま写すものでなく、一応心にとめた思いを筆に託す心の画家です。

中津川市に住み流行にも惑わされず、村に生きる人々を長年描いてきました。牛の連作もその中から生まれました。牛とひとの関りを描くために、スペインへ何度も足を運んだ情熱に圧倒されます。筆は上手がらず素朴に徹しています。名種雄牛「安福号」の作品では確かな描写力をみせ、農家の内

部を俯瞰に捉えた作品では大胆な省略法も使っています。その硬軟の技法を使い分ける術は見事という他ありません。人間の一寸した仕草や時代の匂いを作品の中に見つけるのも、大山作品を観る楽しみです。

平成二十四年 六月 吉日

漫画家 クミタ リュウ



東濃家畜市場 72 × 148

使役の牛

牛と人の関り

子供たちに「牛？」と問えばスーパーの店頭
に並ぶトレイの牛肉かもしれません。「牛」と
いえば、乳牛と肉牛の姿が眼に浮かびます。私
はスーパー種牛を 描き続け沢山の知識にふり
まわされた結果、主題を見失っておりました。
興味本位で得た知識を削ぎ落とし、懐かしい「牛
と人の関り」を描きたいと気がついた訳でした。
昭和三十年頃から農機具が出回り、それまで一
家の働き頭と言われた牛の役が一変しました。
運搬から農作から衣食住に関る牛は人と共に働
き大切な労力でした。今暮らしの中を見渡せば
革靴をはじめベルト、鞆、バック、ソフアー、薬、
食材などは何処にも見当たります。特に声を大
にしたいのは、乳牛の恩恵は食生活の中でトッ
プでしょう、牛乳は子牛が育つ大切な母乳です
が、人の子供にとっても大切な栄養源です。



きんま 曳き



しろかき 37 × 44

外風呂

夏は風呂桶を用水から曳く小川の近くの庭に置きました。午は風を通す窓から顔を出して家族の様子をいつも眺めていました。

風呂は少しばかりの雨の日にも番傘をさして入りました。田んぼの中を通る電車からも見え、車中の人と汲み水を運ぶ主人と言葉を交わしました。夕方の明るいうちの行水を使う風景をあちこちに見かけました。



37 × 44

もらい風呂

もらい風呂とは当番制で、一軒の家へ近所の2～3軒の家族が寄り風呂を利用する形をいいます。水に不便な土地や農繁期の最中では毎日風呂をたてるのは難しく、水汲みや湯沸しは主に子供の仕事でした。もらい風呂では囲炉裏端でお茶を振る舞いオヤツの干し柿や漬物、蜜柑

など食べながら風呂の順番待ちをしました。行事や農作業の情報を交換したりする社交場でもありました。風呂の位置は玄関先の牛の近くにありました。水を汲みこむバケツや体を洗う台、排水を受ける盥などが近くに置かれていました。客達が帰ると当家の主婦は残り湯を使い夜更け遅くまでかかって洗濯をしました。



37 × 44

戦中の牛

牛が運ぶ零戦機

太平洋戦争の華やかな昭和十九年前後、最も早く飛ぶ零式戦闘機を歩みの遅い代表に例えられる牛が運びました。愛知県の知多半島から岐阜県の各務ヶ原迄を牛車2台に積みわけて運びました。提灯の明かりを頼りに最盛期には30頭の牛が列を成しました。知多半島を真夜中に出発し熱田神宮～上前津～大曾根～小牧で朝食休憩～犬山～ 鷲沼～各務ヶ原飛行場迄48キロの道程を運びました。



37 × 44



51 × 40



10 × 14.8

花嫁と牛

当時の結婚は見合い結婚が一般的で、親の意に従い顔も知らない男性と結婚する女性もいました。牛が婚礼の荷を運ぶ風景は見知らぬ人さえ仕事の手を休め、頬をほころばせて見送りました。この場合は婿入りの荷でした。戦争時、召集令状の赤紙がきてから結婚式を挙げ跡取り

の確保を狙った家もありました。一人息子の出征に続き名誉の戦死ともなれば後継ぎの孫を望む訳でありました。結婚し3日で出征し残された花嫁は後家さんになった話も珍しくありません。汽車の車中にも花嫁がモンペをはいて席に着く風景も見ました。下校時花嫁の衣装が紫一色でリヤカーに乗せられている様子を眼にしました。

信仰と牛

菅原道真が大宰府へ流される折、牛は泣いて見送ったといいます。牛と道真は心が通い、道真の危険を知った時、牛は刺客から道真を守りました。天神様は知恵の神様ゆえに合格祈願に牛の絵馬が上がります。臥牛は縁起が良いとされ神社の境内に像が置かれ、病む人は牛の体と自分の病む箇所を交互に触れ、治癒を祈願しました。

善光寺の布かけ牛は善光寺縁起の物語から始まります。信濃の国に布を干す老女がいました。何処からか一頭の牛が現われ布を角に引っ掛け走り出しました。老婆は牛を追って行くと善光寺の仏様の前にきました。「牛に引かれて善光寺まいり」の語源となりました。中国の伝

説の七夕では牽牛は牛飼いでした。天の川を隔て暮らす恋人の織女とは年に一度七月七日の夜二人は出逢います。この夜は笹に願いを書いた短冊を吊るし、女の子は織姫様に因み糸や布を並べお裁縫が上手くなるよう祈りました。農家では牽牛の牛に因み我が家の牛の健康を祈りました。

中津川市の馬籠には小高い山の上にお薬師様が祀られていました。傍には角がある牛の顔を冠のように頂く観音様様の石像が数体ありました。お薬師様に家族の健康を祈り、大切な牛が病気になる様に祈り、牛が亡くなると供養する意味もありました。刻まれた年号は消えかかっているが安政三年と読め、この時代は牛方騒動が起きた頃と思われます。



菅原道真と牛 37 × 44

大山錦子プロフィール

1938年 愛知県犬山市生まれ

所属 日本漫画家協会、日本漫画家会議、
中津川美術家協会

第27回日本漫画家協会特別賞

挿絵・執筆：絵本「昭和の子供 田舎の暮

らし」平凡社、岐阜県郷土史県教育史他、絵巻名種雄牛「安福号」、スペイン祭りの牛 岐阜新聞連載

個展 1978年「美容室シリーズ」中津川市ヒガシ画廊、2005年「素描スペインの牛」銀座 長谷川画廊個展

『牛と人の生活史』—大山錦子が描く世界—



子牛

初めて子牛を見た時その優美な姿に感嘆した鮮やかな記憶があります。鹿の様にほっそりとした肢を支える華奢な爪には、淡く黒い色を帯びた透明なヒールがありました。背の毛並みは艶やかな褐色の部分から腹部にかけ明るくなり、それは子牛のルーツを想像させます。最も私の心を捉えたのは黒い瞳です。アーモンド型の瞳は化粧を施したかと疑うほど淡く柔らかなブルーの毛に彩られ、子牛を知的に品良く引き締めていました。

子牛は私を警戒してか囲いの離れた隅に身を硬くしていました。母牛の姿はなく、生まれ落ちて間もなく母牛から引き離されたのでしょうか。

母牛の毛色は何色？と疑問が湧きました。後に仲買人の古老から「牛は頭から爪先まで無駄なところは無い、一文にもならんのが尻尾の毛だが、この毛先の色が成牛になった時の色じゃ」と尻尾を曲げ毛先を子牛の腹部に当てると本当に同じ色でした。爪先たつ姿はバレリーナを思わせます。

展示の主催・企画・制作

【主催】東京農業大学「食と農」の博物館

【企画・展示案内文責】

黒澤弥悦 学術情報課程教授

【協力】漫画家 クミタリュウ

その他の展示・催事のお知らせ

■常設展

「醸造のふしぎ—微生物が醸す世界—」展 【期間】平成24年3月30日（金）～平成26年3月23日（日）

【主催】東京農業大学応用生物科学部醸造科学科、同短期大学部醸造学科

鶏（ニワトリ）剥製標本コレクション

展示中

色々な酒器コレクション

展示中

農大卒業生の蔵元紹介（酒瓶のオブジェ）

展示中

■企画展

今知られていること、伝えること「タロイモは語る」

【期間】平成24年10月12日（金）～平成25年3月24日（日）

【主催】（財）進化生物学研究所

「古農具展」—その技と美—

【期間】平成24年10月12日（金）～平成25年3月24日（日）

【主催】東京農業大学学術情報課程、東京農業大学「食と農」の博物館